

## 22. 「七峯樵夫」という但木土佐の号は 何によったのか

問 七峯樵夫という但木土佐の号は、何によったものか。

答 七峯とは七ツ森のことで、但木土佐の知行地吉岡の真近にある大倉・遂倉〔とがくら〕・鎌倉・蜂倉・松倉・撫倉・笹倉山の総称名数であります。但木土佐は、その人間形成に大きな影響を与えた七ツ森の呼び名をとって、七峯樵夫と号したのです。「仙台郷土史夜話」（三原良吉）に『戊辰（ぼしん）役に仙台藩の全責任を負って明治二年五月東京で刑死した国老但木土佐成行は、吉岡千七百石、宿老（しゅくろう）の家柄で、朝夕ながめて育った七ツ森の名をとって、七峯樵夫と号した。東京高輪東漸寺の墓にも七峯樵夫之墓とだけ刻んである。』また、「大和町史」下巻（大和町）には『土佐はその号を「七峯樵夫」と言った。……土佐は自分を七ツ森のふもとで育ちたつきする樵夫、と考えていたのであった。これは、土佐がどのような名士となり、中央にはなばなく活躍しても、その出で来、そして帰り行くべきふるさととは、七ツ森の国、吉岡であり大和町であることを語っているものとして、興味深い。彼は東京に刑死した後も自分の墓を「七峯樵夫之墓」と名づけさせた。大和町の人として死んでいったことになる。』と記しています。

七ツ森は、美事な配置をなして並列するトロイデ型火山の山々で、古くからその景観が世人の注目をひきつけてきました。「封内名蹟志」（佐藤信要）に『七巖峯 黒川郡。其山形聳然。犬牙相列。人常指示疑何峯巒。故郷人呼称七区蜂。但其三峯乃属于宮床。其一巨魁峯〔笹倉〕其二松倉峯其三積倉峯〔撫倉〕是也。四峯乃属于吉田邑。其一尖頭峯〔遂倉〕其二鎌索峯〔鎌倉〕其三飛蜂峯〔蜂倉〕其四大倉峯是也。先君肯山公〔綱村〕席上有談此者。此時先君省左右曰。中華有九巖名峯。古今風藻及于茲。然此地亦須称七疑峯。侍臣相賀。自是州人呼七疑峯。遂伝其旨。』  
「封内風土記」卷之9（田辺希文）に『吉田邑 戸口凡二百三十四。有升沢池。但木土佐長行附属歩卒二十四口。男女凡百六十。馬四十三……薬師堂五。其一。在尖倉森。其二。在鎌索森。其三。在蜂倉森。其四。在大倉森。其五。在号金取地。共不詳何時創建。……七疑峯。其三。属宮床邑。其四属本邑。名迹志曰。其山形聳然犬牙相列。人常指示疑何峯巒。故郷人呼称七ツ森。其三峯属宮床邑。其一巨魁。其二松倉峯。其三積倉峯是也。四峯属吉田邑。其一尖倉峯。其二鎌索峯。其三飛蜂峯。其四大倉峯是也。肯山君曰。中華有九疑峯。此地亦須称七疑峯。自是州人呼七疑峯。』

「仙台郷土史夜記」（三原良吉）に『トカハオナマサ殿 七ツ森はトロイデ型火山 ふる里の山、七ツ森を仙台の方からながめると、西から東へ次のように並んでいる。

松倉（マツクラ）山 291メートル  
 撫倉（ナデクラ）山 360メートル  
 大倉（オオクラ）山 302メートル  
 蜂倉（ハチクラ）山 280メートル  
 鎌倉（カマクラ）山 300メートル  
 尖倉（トガクラ）山 307メートル  
 笹倉（ササクラ）山 506メートル

土地の人々は山の名をおぼえやすくササクラをしんがりとして、西から頭字を横にトカハオナマサと呼ぶ。まるで人間の姓名みような総名であるが、この山を明け暮れながめている、ふもとの人々の親しみがわかって、ほほえましい。一名を大森山ともいう笹倉山が最高で、他はごらんの通りの標高であるが、これでも七つとも全部がトロイデ型火山であることは論より証拠、山上に押し上げられた水成岩の餅盤（べいばん）がある。この岩のことを古語でクラというのである。たとえ低くとも山なのに、モリというのも古語で、山の神を迎える山を意味し、仙台周辺だけでも、ウドが森〔生出森〕、権現森、亀ヶ森があるように東北地方に多い地名である。大森山を親方（長男のこと）として七人の兄弟に見立てていたことは、仙台の古い狂歌に〔保田光則作〕

人ならばはらからなれや並み立てる七ツ森てふ山の姿は

というのがあり、明治時代仙台に在住した外国人たちも、この山をセブン・シスターズと呼んでいた。誰の目も同じだったとみえる。田山花袋は、大年寺山からながめ「七ツ森という面白い形をした山に、雲が湧き出すようにかかっている有様は私の心をひくに充分であった。私はしばしそこに立ち尽した」と書いている。初めて見る人には名を問わずにはいられない山容で、昔、奥道中往来の旅人は、吉岡と志戸田の境吉田橋の上に立ち止ってながめたにちがいない。

山の名を問えば日あしも七ツ森宿とらばやといそぐ旅人〔読人不詳〕と仙台の昔の狂歌にある。七ツは午後四時にあたる。七擬峰という唐様（からよう）の名は御一門宮床八千石の伊達肥前宗房の長男として、七ツ森の山ふところに育った五代藩主吉村の命名である。『宮城県百科事典』に『七ツ森 大和町吉田・宮床。東北25勝の一つに数えられる七疑（疑）峰として古くから世に知られる。『封内名跡志』に『肯山公（伊達綱村）曰中華有九疑名峰此地亦須称七疑峰』とある。これらの鐘状孤立峰は、標高 100m内外の丘陵上に北からほぼ南東にかけて、<sup>とがくらやま</sup> 遂倉山（307.8m）・<sup>かまくらやま</sup> 鎌倉山（313m）・<sup>はちくらやま</sup> 蜂倉山（鉢盛山、293.1m）・大森山（327.1m）・<sup>なでくら</sup> 撫倉山（358.7m）・松倉山（291.2m）と約 3kmの間に並び、西南約 4kmに離れて笹倉山（大森または大森山、506.5m）が位置する。これら 7 峰は、鮮新世における火山作用によって形成された古い火山体が浸食され、火山体は消失し、<sup>しそきせきあんざんがん</sup> 紫蘇輝石安山岩、火道集塊岩や溶岩の部分が小山体として残った火山岩頸である。仙台付近や仙北平野南部で、特異な地形であるため、巨人伝説が生まれるもとともなった。』とあります。

但木家は、伊達家譜代の名門中の名門であります。「伊達正統世次考」卷之上（伊達綱村）に『朝宗公。此時有老臣五人。謂。伊波野、堀越、菅、原田、但木也。〔下略〕』後に、この但木家から4分家が出ていますが、その中で、但木土佐家は最も新しい分家で、本家第6代の重久が、次男久清を分家させてからの家柄です。久清の子重信が篤実謹直な人物で奉公の誠を尽し1,500石に加増、元禄8年〔1695〕奉行に抜擢され、9年12月には代々宿老に班せられ、本家を越える家格となりました。重信の孫第4代の顕行が宝暦6年〔1756〕奉行に任ぜられ、翌年磐井郡東山大原邑から、黒川郡今邑吉岡に知行替となり、第8代の土佐成行に至ったのであります。「伊達世臣家譜」卷之5宿老之部の但木の家譜に『但木 又称只木、伝言先世住常州但木邑、因氏焉。姓橘、其先出自但木下野初称惣九郎重久、又左衛門、不知其先、以但木伊賀守顕行為祖其裔世為召出家、今保三百石禄、称但木惣助益行是也、以重久之第二男惣右衛門久清為祖、』とあり、但木土佐について「仙台人物史」（今泉篁洲）が、次のように伝えています。『但木土佐 戊辰ノ役奥羽連盟軍ノ起ルヤ仙台藩其盟主ト為ル此時ニ当リ但木土佐一藩ノ軍事ヲ総管ス藩主罪ヲ闕下〔けっか〕ニ謝スルニ及ヒテ朝廷其首謀ヲ索ム土佐自ラ進ミ同僚坂英カト共ニ東京ニ緇送セラル人アリ脱走ヲ勸ム土佐笑テ曰ク我輩ニシテ亡奔センカ藩公ヲ如何セント終ニ罪ヲ一身ニ負ヒ従容死ニ就ク嗚呼何ソ其壯烈ナルヤ之ヲ生ヲ今日ニ偷〔ぬす〕ミ揚々自得ノ色アルモノニ比スレハ其懸隔何ソ霄壤〔しょうじょう〕ノミナランヤ土佐名ハ成行七峰樵夫ト号ス黒川郡吉岡邑千五百石ヲ食ミ仙台藩ノ宿老タリ其国老ニ任セラル、ヤ〔慶応2年9月23日〕開国ヲ主トスルヲ以テ攘夷論者ト容レス目スルニ売国奴ヲ以テシ屢々危害ニ遇フ元治慶応ノ間国家多事ナリ幕府政權ヲ朝廷ニ奉還スルニ及ヒテ諸侯ヲ京師ニ会ス藩主慶邦公会々〔たまたま〕病テ行ク能ハス土佐代テ京師ニ赴キ会議ニ与カル西南諸藩ノ論幕府ニ不利ナルモノ多シ閣老某土佐ヲ二条城ニ召シ將軍路ヲ大坂ニ取り海路東帰ノ意ヲ示ス土佐事端ヲ啓〔ひら〕カンコトヲ虞レ其挙ノ不可ナルコトヲ論シ且ツ曰ク方今諸外蕃皆爪牙ヲ磨シテ我隙ノ乘スヘキヲ窺〔うかが〕ヘリ是豈干戈ヲ内ニ動カスノ秋ナランヤト閣老聴カス終ニ伏見ノ役アリ既ニシテ朝廷仙台藩ヲシテ討会ノ師ヲ興サシム土佐命ヲ拜シテ還ル即チ藩公ノ説クニ会藩ヲシテ謝罪セシムル猶毛利氏闕下ヲ犯シ謝罪シタルノ例ニ由ルノ利ナルヲ以テシ玉蟲佐太夫若生文十郎二人ヲ挙ケテ使事ヲ任ス二人会津ニ抵〔いた〕リ説クニ前議ヲ以テス会藩躊躇シテ決セス時ニ奥羽鎮撫使海路東下シ討会ノ師ヲ促カス藩主即チ兵ヲ出シテ国境ニ屯シ先鋒諸軍進撃シテ互ニ死傷アリ会藩遂ニ降ヲ乞フ藩主九条〔道孝〕総督ニ謁シ会藩ノ為ニ哀ヲ乞フ総督之ヲ許サントス參謀世良修蔵等聴カス是ニ於テ坂英カヲシテ西上陳情セシム江戸ニ至レハ当路者一二雄藩ノ人ナルヲ以テ容易ニ達スヘカラサルヲ知り太田盛ヲシテ代テ西上セシム時ニ世良修蔵カ其同僚大山格之助ニ送ル密書ヲ得タリ其書ノ略ニ曰ク会津ノ降服ハ許スヘカラス但允許ヲ得ルヲ名トシ遷延日ヲ経ルノ間彼ノ兵備ヲ怠ラシメ以テ大軍一挙奥羽ヲ掃蕩スルニ若カスト我兵見テ大ニ怒リ直チニ修蔵ヲ福島ニ斬リ大ニ奥羽ニ徇〔とな〕ヘ連盟ノ軍ヲ起シ白河相馬越後諸道ニ向テ兵ヲ進ム既ニシテ三春相馬米沢諸藩西軍ニ降リ我兵氣沮喪〔そそう〕

ス藩主遂ニ遠藤文七郎ノ議ヲ容レ降ヲ乞フ是ニ於テ土佐縛ニ就キ東京ニ拘禁セラル案問數回土佐明カニ所思ヲ陳シ兵ヲ挙ルノ事ハ藩主ノ意ニアラス小臣ノ一慮ニ出テタルコトヲ述フ明治二年五月十九日叛逆首謀ノ罪ニ坐シ麻布仙台藩邸ニ於テ坂英カト共ニ斬ニ処ス時二年五十三其死ニ臨ムヤ英カト置酒訣飲シ從容國風ヲ賦ス曰ク『雲水の行衛はいつこ武蔵野のたゝ吹く風にまかせたらなん』遺骸ヲ芝高輪東禅寺ニ葬リ表シテ『七峰樵夫之墓』ト曰フ土佐ノ国政ヲ執ルヤ夙ニ時勢ノ趨ク所ヲ知り軍備ハ一ニ洋式ニ法〔のっ〕トリ又軍艦ヲ造リ大小銃砲ヲ制シ大ニ殖産興業ノ途ヲ講セリ又家士ヲ以テ一隊ヲ組成ス服装銃器皆洋式ニ由リ且技芸精練一藩ニ冠タリ土佐深ク大槻磐溪ヲ尊信ス其開國ヲ以テ主義トナスモノ蓋シ磐溪ノ説ヲ信スルニ由ルト云フ抑モ土佐ノ為ス所專ラ王室ヲ尊崇シ邦家ヲ泰山ノ安キニ置カントスルニアリ而テ事志ト違ヒ遂ニ叛逆ノ首謀ヲ以テ刑セラルト雖モ其至誠國家ヲ憂フルニ至リテハ敢テ人後ニ落チス徒ニ其成敗ヲ以テ之ヲ論スルハ酷モ亦甚シト謂フヘシ』

注(1) 「地名語源辞典」(山中襄太)に『もり〔森、守、盛、母里〕(地名用語)ムレ、ムロ、モロ、モリは同源同義の語で、本来はヤマ(山)の意である。モリのつく山の名は東北地方に特に多い。たとえば、青森県に黒森、甚吉森、烏帽子森、木賊森など、岩手に高森、大黒森、薬師森、毛無森など、秋田に笹森、赤倉森、竜ヶ森など、山形に八森、天狗森など、〔宮城に七ツ森、生出森など、〕なお、和歌山に麦粉森山、城ヶ森山、檜尾森山など、四国に鈴ヶ森、雨ヶ森、天狗森、甚吉森など、琉球に雨乞森、平家森、波照間森、運玉森などがある。その他の地方にも、ところどころにある。朝鮮の古語で山を maru といったのが mure となり、現代では mori とか moi とかいい、済州島では「ひとつだけはなれた山」を maru といって旨の字をあてている。東北地方での方言モリは「ひとつだけはなれた岡」のことで、「何々森」という山は円山形で、大小高低の区別はない。モリはアイヌ語 mo-ri (小さい・山) だと山本直文氏という。モリがアイヌ語ならば北海道にもたくさんモリのつく山名があるはずだと鏡味完二氏という(2~3あるだけ)。森を意味する次のような語とも、日本語モリは関係があるのではなかろうかーマレー半島のベシン、マラッカなどの meri、サカイ、バナール、スティエン、ネグリートなどの bri、ベシンの mbri、サンタリの buru、ウラル・アルタイ語の mulu (満洲)、mori (サモエード)、muron (ヤクート)、muor、mur (フィランド) など。松尾俊郎氏という(地名の研究 pp. 115~6) — 森は古く神社所在地または神社そのもの、万葉集に神社をモリと読む例がある。〔モリに社の字を当てたというのが正しい。〕杜(モリ)という字は「社木」の二字を略して合せた字。〔正しくは社の崩し字から生れた国字である〕。森のつく地名は神社を意味することが多く、森は宮、森戸(森処)は宮地、宮居、宮内、大森は大宮、森山(守山)は宮山、森脇は宮脇の意。森はまた山の意で、東北や西国に多いが、この意味では盛上った意との説がある。』と

ある。

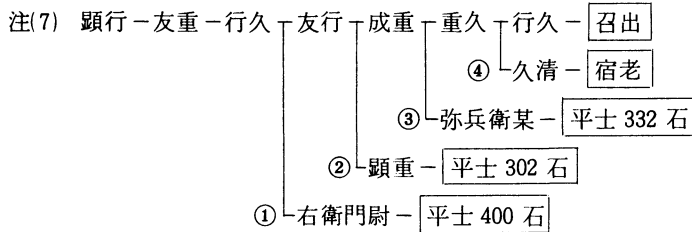
注(2) p. 304の注(3)参照

注(3) p. 213の注(6)参照

注(4) p. 403の注(4)参照

注(5) p. 71の注(3)参照

注(6) p. 58の注(1)参照



本家(召出 300 石) 顯行－友重－行久－友行－成重－重久－行久－久重－佑重－  
 重直－友行－益行－清行－

第 1 分家(平士 400 石) 右衛門尉(太炊助)－五郎右衛門－満六－久隆－行直－  
 行恒－行貫－行隆－養助－

第 2 分家(平士 302 石) 顯重－顯定－顯時－顯次－顯普－顯善

第 3 分家(平士 332 石) 弥兵衛某－弥兵衛某－重次－重延－行隆－行充－市三郎－

第 4 分家(宿老 1,500 石) 久清－重信－顯高－顯行－長行－行豊－弘行－成行

但木土佐成行の長子に左近がいた。「鹿門岡千仞の生涯」(宇野量介)に次の記事がある。『但木芳陵はまた芳臯(ほうこう)で、但木土佐の長子である。経史を大槻磐溪、油井牧山に学び、詩画をよくした。明治五年八月六日歿(年三十四)。昨年安政六年〔1859〕八月、芳陵の東帰を送って千仞は画家東金岳(東菜の第三子)と同舟して中川に宿泊、風月の夜景の幽寂に詩を作って、「同聴蛙声俱」と詠じた。殆ど睡ることなく、別離の愁を暫時忘れるほど楽しんだ。そして翌朝この水辺一樓で、また酒を呼んで快飲した。金岳が画を作して興を添えたのであった。芳陵の侍者は出発を急いだが、芳陵は去り難く、急がされるのを不快としたほどであった。』「仙台人名大辞書」(菊田定郷)には『但木左近 志士。諱は篤行、字は子誠、通称志摩、後ち左近と改め、耕雲、芳臯と号す。国老但木土佐の長子、経史を大槻磐溪、油井牧山等に学び、詩画を善くす、戊辰の変父土佐の事に坐して幽閉せられ、幾もなく積さる、明治五年八月六日歿す、享年三十四、黒川郡吉岡保福寺に葬る。』とある。土佐の子孫は暫らくの間、立花〔本姓橋〕と改姓して世間を忍び、世の白眼に堪えた。

注(8) 「仙台人物史」(今泉篁洲)に『坂英力 慶応二年幕府仙台藩主伊達慶邦公ヲ召ヌヤ偶々公病アリ世子茂村君代テ江戸ニ赴ク坂英力国老ヲ以テ之ニ随フ將軍英力ヲ召シ謀ルニ

機事ヲ以テス且ツ深ク藩主ニ寄託スル所アリ英力其境遇ニ感激シ甘諾シテ藩ニ帰ル後チ二年戊辰ノ役アリ但木土佐ト共ニ首謀ノ罪ヲ以テ斬ニ処セラル英力ノ鞠躬〔きっきゅう 氣をつかい力を尽す〕幕府ヲ庇〔ひ〕スルモノ蓋シ將軍知遇ノ恩ニ感スルナリ英力名ハ時秀黄海漁夫ト号ス能登保定ノ子ナリ世々伊達家ノ一族ニシテ東磐井郡黄海〔きのみ〕五百石ヲ領ス少〔わか〕フシテ藩儒松本子新ニ從テ經史ヲ学フ又兵学ヲ内海氏ニ影山流劍術ヲ山田氏ニ受ク皆其蘊奥〔うんおう〕ヲ得タリ安政三年〔1856〕御近習御申次ニ挙ケラレ御祭祀奉行ヲ兼又尋テ御小姓頭ニ転ス五年君命ニ依リ劍術師範トナル亡幾〔いくばくもなく〕官ヲ辞シ宮城郡大代村ニ退キ静ニ時勢ノ趨ク所ヲ察ス知人往々就官ヲ勸ムレトモ可〔き〕カス元治元年〔1864〕毛利氏闕〔けつ。皇居〕ヲ犯ス藩主大ニ驚キ特使英力ヲ召シ急ニ上京セシム英力直ニ起テ途ニ上リ画策スル所アリ慶応二年〔1866〕国老ニ挙ケラル〔「東藩史稿」には慶応3年1月11日〕爾来但木土佐ト専ラ国政ヲ執ル四年討会ノ師ヲ興シヤ白石本宮ニアリ土佐ト共ニ軍国機務ヲ見ル会津ノ降ヲ納レ之ヲ鎮撫総督ニ執達スルヨリ奥羽連盟軍ヲ起スニ至ルマテ皆其事ニ与カラサルハナシ七月輪王寺宮殿下兵ヲ仙台ニ避ケ令旨ヲ藩主ニ賜フテ奸徒ヲ掃蕩〔そうとう〕セシメラル藩主病ヲ以テ果サス英力ヲシテ代リテ軍事ヲ督セシメ賜フニ正宗ノ刀ヲ以テス且ツ命シテ云〔いわ〕ク約束ニ從ハサルモノハ即チ斬レト英力感泣賜ヲ拜シ帯テ白石ニ至リ從者ヲ戒テ曰ク予カ此行万死アリテ一生理ナシ恩賜ノ宝刀敵ニ委スヘカラス予カ死後必ス之ヲ奉還セヨト進テ須賀川ニ至リ諸軍ヲ指揮ス時ニ三春守山ニ藩西軍ニ降り二本松城ヲ攻ム我兵腹背敵ヲ受ケ万勝算ナシ仍テ兵ヲ収メテ会津ニ入り米沢ヨリ福島ヲ經テ国境ノ險ヲ扼セントス人アリ説テ曰ク盍ソ止マリ戦ハサルヤト英力笑テ曰ク未タ以テ我元ヲ敵ニ授クヘカラス国境ニ戦ヒ若シ敗ルハ時ハ仙台城ヲ燒キ藩主ヲ高館ニ移シ敵ト対峙〔たいじ〕スヘシト且孫子ヲ引テ曰ク諸侯隣国ニ戦フヲ散地ト曰フ兵散地ニアル時ハ人々帰家ヲ思フ今我兵皆散地ニアリ若シ仙台城ヲ燒カハ帰ルニ家無カラン是レ死地ニ陥ルナリ又曰ク兵ハ死地ニ入テ生ヲ求ムト又西軍暖地ニ生長ス自今天候漸ク寒シ彼等安ソ能ク堪エン其降雪ヲ待チ海路平瀉〔ひらかた〕ヨリ其背ニ乗セハ一挙ノ下ニ彼等ヲ壓〔みなごろし〕ニスルヲ得ヘシト露帝彼土兒〔ペートル〕カ仏那勃翁〔ナポレオン〕ヲ窺〔くるし〕メタルノ説ヲ挙ケ方略ヲ陳スル最モ詳密ナリ既ニシテ藩論一變降服ニ決ス是ニ於テ土佐ト共ニ捕ハレ後チ斬ニ処セラル其辞世ノ詩ニ曰ク「桃花忽散春風憾。亦發明年雨露思。人生榮枯何可意。冀安分際順乾坤。」其將ニ斬ラレントスルヤ知人遺言ヲ問フ笑テ曰ク今ニ及テ何ヲカ言ハンヤ只心ニ関スルハ母ニ先チテ死スルノ一事是ノミ諸君宜ク余カ意ヲ母ニ致セヨト從容死ニ就ク時ニ明治二年五月十九日年三十七遺骸ヲ芝高輪東禪寺ニ葬リ表シテ「黄海漁夫之墓」ト曰フ』とある。

注(9) p. 40 の注(1)参照

注(10) 今は「但木土佐成行之墓」と建て替えられている。その右に並ぶ坂英力の「黄海漁夫之墓」も同時に「坂英力時秀之墓」となっている。

注(11) p. 4の注(5)参照

資料 仙台郷土史夜話（三原良吉）

大和町史下巻（大和町）

## 23. 九思山とは

**問** 仙台陸軍幼年学校の校歌の歌詞に『九思山上歳寒の松嘯けば三神峯に』とあるが、この九思山とはどの山のことですか。

**答** 仙台陸軍幼年学校は、仙台陸軍地方幼年学校として明治30年9月仙台市榴岡に設立、軍縮で大正13年4月廃校となるまで、1-26期生を送り出しました。明治38年入校の第9期生50名〔第8期生の延期生を加えて55名〕が、記念事業として校庭の一隅に共同作業で作った築山が九思山であります。九思山の名は、第九期生の九にちなみ、国語漢文担当の平野彦次郎・高成田忠右衛門教官が、論語季子篇から「九思」の語を選んで命名したものです。九思とは、君子が学を修め道に志すのに日常注意すべき九つの事項、即ち、視るには「明」を思い、聴くには「聰」を思い、色には「温」を思い、「貌」〔顔色。举止〕には恭を思い、言には「忠」を思い、事には「敬」を思い、疑わしきことには「問」わんと思ひ、忿〔いかり〕には「難」を思い、得ることを見れば「義」を思う、この九つの徳目の名数が「九思」であります。出典の「論語」季氏編に『孔子曰君子有九思視思明聴思聰色思温貌思恭言思忠事思敬疑思問忿思難見得思義』とあります。

この九思山は、その後、代々の幼年学校生に受け継がれ、精神陶冶のシンボルとして、大きな影響を与える存在となっていました。この九思山について「山紫に水清き」（松下芳男編）に次の記事があります。『第九期生にちなんで、何か記念事業をとという話が起ったのが、二年生の始めであった。このことを大沼生徒監に申し述べ、その賛成を得て、いろいろ審議しているうちに、同生徒監は山形聯隊に転任となり、池田信吉生徒監と交替した。池田生徒監もこの企を快く容れ、さらに審議を重ねた末、三年生の始めごろから、体操場の一隅に築山を作ることになり、放課後運動時間の一部をさいて、土盛作業を始め、明治四十年の暮小丘を完成した。そして榴ヶ岡に因んで躑躅の苗を植えて「九思山」と命名した。翌四十一年の春には、躑躅の花が見〔美〕事に咲いて、われわれの卒業を美しく飾ってくれたように思われた。「九思」の由来は次のようであって、平野彦次郎、高成田忠右衛門二教官の選である。